

資治通鑑 第 219 卷

【唐紀三十五】 起柔兆涸灘十月，盡強圉作噩閏月，不滿一年。

■唐、統国訳漢文大成 經子史部 第 12 卷 285p

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝中之上至德元年（丙申，756年）

■冬，十月，辛巳(17)朔，日之を食する有り，既。

■上は順化を發し，癸未(19)，彭原に至る。

■**【諫諍之塗を開く】**初め，**李林甫**は相と為り，諫官は事を言うに皆な先ず宰相に白し，退きて則ち又た言う所を以て之を御史に白す。事を言うに大夫の同署を須つ。是に至りて，敕して盡く其の弊を革め，諫諍之塗を開く。又た宰相をして政事に分直し(政事堂に在りて分けて筆に當り及び上の旨を承けしむ)筆、承旨，旬日に而して更ら令む，**林甫**及び**楊國忠**之專權に懲りるが故也。

■**【第五琦の塩專売制の開始】****第五琦**は上に彭原に見え，請うに江、淮の租庸を以て輕貨を市い，江、漢に溯り而して上りて洋川(洋州、現・陝西省漢中市西郷県)に至り，漢中王の**瑒**をして陸運して扶風に至り以て軍を助け令む。(12-286p)上は之に従う。尋ぎて**琦**に山南等五道度支使(度支使はここから始まる)を加える。**琦**は**榷鹽法**(塩專売制。琦は鹽法を變じ儘く天下の塩を榷し、山海の井籠に就きて塩院を置き、吏をして出糶せしむ)を作り，用以て饒ゆたかなり。

【房琯の反撃開始、失敗】

■**【房琯は賀蘭進明と隙有り】****房琯**は賓客を喜び，談論を好み，多く知名之士を引き抜き，而して庸俗を輕鄙し，人は多く之を怨む。北海太守の**賀蘭進明**は行在に詣り，上は**琯**に命じて以て南海(廣州、広東省粵海道南海県。現・仏山市南海区。この時兵興り、方鎮の重任は必ず台省の長官を兼ねる)太守と為し，御史大夫を兼ね，嶺南節度使に充てしむ。**琯**は以て攝御史大夫と為す。**進明**は入りて謝し，上は之を怪み，**進明**は因りて言う、

「**琯**と隙有り」

と，且つ曰く、

「**晉**は**王衍**(**晋紀**にあり)を用いて三公と為し，浮虚を祖尚し，中原の板蕩(板蕩の詩は、周室天に壞れ、天下に綱紀文章無きを刺するの詩なり。後人は率ねこの二詩を引きて以て天下の大乱に論う)を致す。今**房琯**は専ら迂闊の大言を為し以て虚名を立て，引用する所は皆な浮華之黨なり，真に**王衍**之比也！**陛下**は用いて宰相と為す，恐らくは社稷之福に非ず。且つ**琯**は南朝(蜀の上皇の地、肅宗は関中の北に居る)に在りて**上皇**を佐け，**陛下**をして諸王と諸道の節制を分けて領せ使め(前卷にあり)，仍ほ**陛下**を沙塞空虚之地(靈武など砂漠の辺地)に置き，又た私黨(**李峴**・**李承式**・**鄧景山**など)を諸道に布き，大權を統べ使む。其の意は以為らく**上皇**の一子天下を得れば，則ち己は富貴を失わず，此れ忠臣の為す所を乎？」

上は是に由り之を疏んず。

■**【房琯は三軍を率いて兩京奪還を目指す】****房琯**は上疏して，自ら兵を將いて兩京を復するを請う。上は之を許す。持節、招討西京兼防禦蒲、潼兩關兵馬、節度等使を加える。**琯**は請いて自ら參佐を選び，御史中丞の**鄧景山**を以て副と為し，戸部侍郎の**李揖**を行軍司馬と為し，給事**中**の**劉秩**を參謀と為す。既に行き，又た兵部尚書の**王思禮**をして之が副たら令む。**琯**は悉く戎務を以て**李揖**、**劉秩**に委ね，二人は皆な書生にして，軍旅に聞せず。**琯**は人に謂って曰く、

「賊の曳落河(同羅鉄勒・契丹・奚の騎馬民族出身者で、胡語で勇士の意味)は多しと雖も、安んぞ能く我が劉秩に敵せんや！」

瑄は分けて三軍と為す。裨將の楊希文をして南軍を將いさ使め、宜壽(天寶元年に整屋県を更めていう。鳳翽郡に属す。現・陝西省西安市周至県)より入る。劉貴哲は中軍を將い、武功(現・陝西省咸陽市武功県武功鎮)より入る。李光進は北軍を將い、奉天(現・陝西省咸陽市乾県)より入る。光進は、光弼之弟也。

■賀蘭進明を以て河南節度使と為す。

■[穎王之璪など諸王]穎王之璪之成都に至る也、崔圓は迎え謁し、馬首に拜し、璪は之を止めず。圓は之を恨む。璪は事を視ること兩月、吏民は之を安んず。圓は奏して璪を罷めて、内宅(京師に十宅有り、以て諸王之未だ闇に出でざる者ほ置く。この時成都に在り、行宮を内宅と為す)に歸ら使む。武部侍郎の李恒を以て劍南節度使と為し、之に代わらしむ。恒は、峴之兄也。上皇は尋いで璪に命じ陳王之珪と上に詣りて宣慰せしめ、是に至りて、上に彭原に見える。延王之玢は上皇に従いて蜀に入り、車駕を追いて及ばず。上皇は怒り、之を誅せんと欲し、漢中王之瑒は之を救い、乃ち玢に命じて亦た上の所に詣らしむ。(12-287p)

■[雍丘攻略失敗]甲申(20)、令狐潮、王福德は復た歩騎萬餘を將いて雍丘を攻める。張巡は出でて撃ち、大いに之を破り、斬首は數千級、賊は遁げ去る。

■[房瑄の敗戦]房瑄は中軍、北軍を以て前鋒と為し、庚子(36)、便橋に至る。辛丑(37)、二軍は賊將の安守忠に咸陽之陳濤斜(咸陽県の東に在り、その道斜めなり)に遇う。瑄は古法に效い、車戦を用い、牛車二千乗を以て、馬歩之を夾む。賊は風に順いて鼓噪し、牛は皆な震駭す。賊は火を縦ちて之を焚き、人畜は大いに亂れ、官軍の死傷者は四萬餘人、存する者は數千にして已む。癸卯(39)、瑄は自ら南軍(宜壽)を以て戦い、又た敗れ、楊希文、劉貴哲は皆な賊に降る。上は瑄の敗れるを聞き、大いに怒る。李泌は之が為に營救し、上は乃ち之を宥し、瑄を待つこと初めの如し。薛景仙を以て關内節度副使と為す。

■[回紇][回紇の使者・公主到着]敦煌王之承栄(前卷に派遣)は回紇の牙帳に至り、回紇可汗は女を以て之に妻あわせ、其の貴臣を遣わして承栄及び僕固懷恩と偕な來たりて、上に彭原に見える。上は厚く其の使者を禮し而して之を歸し、回紇の女に號の毘伽公主を賜わる。

【中原の鬪い、回紇の参戦】

■[顏真卿奮闘も平原から逃亡]尹子奇は河間(現・河北省滄州市)を圍むこと、四十餘日下らず。史思明は兵を引いて之に會す。顏真卿は其の將の和琳を遣わして萬二千人を將いて河間を救わしめ、思明は逆え撃ち、之を擒とし、遂に河間を陥す。李奂を執りて洛陽に送り、之を殺す。又た景城を陥し、太守の李暉は湛水(新唐書には、河に赴くと)に赴きて死す。思明は兩騎をして尺書を繼し以て樂安(棣州。景城は陥ち、樂安は孤絶なり。人心は危懼し、城主守る能わず)を招か使め、即時に郡を擧げて降る。又た其の將の康沒野波をして先鋒を將いて平原を攻め使め、兵は未だ至らず、顏真卿は力の敵せざるを知り、壬寅(38)、郡を棄てて河を度りて南に走る。思明は即ち平原の兵を以て清河(貝州)、博平(博州)を攻め、皆な之を陥す。思明は兵を引いて烏承恩を信都(冀州)に圍み、承恩は城を以て降り、親ら思明を導きて城に入り、兵馬、倉庫を交し、馬は三千匹(史は承恩の兵力が以て拒守するに足るといふ)、兵は五萬人、思明は承恩を送りて洛陽に詣らしめ、祿山は其の官爵を復す。

■[饒陽の張興の鋸殺]饒陽の裨將の束鹿(饒陽郡に属す。本は鹿城県。直隸省保定道束鹿県の北二十五里、現。河北省石家庄市辛集市)の張興は、力は千鈞を擧げ、性は復た明辯なり、賊は饒陽(217卷天寶十四載)を攻め、年を彌りて下る能わず。諸郡が皆な陥るに及び、思明は力を並せて之を圍み、外救は俱に絶え、太守の李系は窘迫し、火

に赴きて死し、城は遂に陥つ。**思明**は**興**を擒とし、馬前に立て、謂って曰く、
「將軍は眞の壯士なり、能く我と共に富貴ならん乎？」

興は曰く、

「**興**は、唐之忠臣なり、固より降る理無し、今數刻之人(張興の志は必死に在り、自ら言う、命數刻にあり)なる耳、願わくは一言し而して死せん。」

思明は曰く、

「試しに之を言え。」

興は曰く、

「**主上**は**祿山**を待ち、恩は父子の如し、群臣は及ぶ莫し、徳に報いるを知らず、乃ち兵を興して闕を指し、生人を塗炭にし、大丈夫は凶逆を剪除する能わず、乃ち北面して之が臣と為らん乎！僕は短策有り、足下は能く之を聴く乎？(12-288p)足下が賊に従う所以は、富貴を求める耳、譬えば燕が幕に巢くうが如し(左傳の呉の李札の言)、豈に能く久しく安からんや！間に乗じ賊を取り、禍を轉じて福と為し、長く富貴を享けるや何如、亦た美ならず乎！」

思明は怒り、命じて木上に張り、鋸して之を殺し、詈ること口を絶たず、以て死に至る。

■**[安祿山軍の殘酷]**賊は一城を破る毎に、城中の人の衣服、財賄、婦人は皆な掠む所と為る。男子、壯者は之をして擔せ使め、羸、病、老、幼は皆な刀槊を以て戯れに之を殺す。**祿山**は初め卒三千人を以て**思明**に授け、河北を定め使め、是に至り、河北は皆な之を下し、郡に防兵三千を置き、雜えるに胡兵を以て之に鎮す。**思明**は博陵に還る。

■**[回紇援軍は范陽に到着]****尹子奇**は五千騎を將いて河を度り、北海を略し、南に江、淮を取らんと欲す。會々**回紇可汗**は其の臣の**葛邏支**を遣わして兵を將いて入援し、先ず二千騎を以て范陽の城下に奄至し、**子奇**は之を聞き、遽に兵を引いて歸る。

■**[回紇は郭子儀と合し河曲を平らぐ]**十一月、戊午(54)、**回紇**は帶汗谷(新唐書には呼延谷に作る。蓋し語転なるのみ)に至り、**郭子儀**の軍と合す。辛酉(57)、同羅及び叛胡と榆林(勝州、現・榆林市榆陽区)の河北に戦い、大いに之を破り、斬首は三萬、捕虜は一萬、河曲は皆な平らぐ。**子儀**は軍を洛交(鄭州上郡、陝西省榆林道鄭県治、現・延安市富県)に還す。

■**上**は**崔涣**に命じて江南を宣慰せしめ、兼ねて選舉に知たらしむ。

■**令狐潮**は衆萬餘を帥いて雍丘の城北に營し、**張巡**は邀え撃ちて、大いに之を破り、賊は遂に走る。

■**[永王璘の江南自立の企み]****永王の璘**は、幼くして母を失い、上の鞠養する所と為り、常に之を抱きて以て眠る。**上皇**に従いて蜀に入る。**上皇**は諸子に命じて天下の節制を分總せしめ、諫議大夫の**高適**は諫め、以て不可と為す。**上皇**は聽かず。**璘**は四道節度都使を領し、江陵に鎮す。時に江、淮の租賦は江陵に山積し、**璘**は勇士數萬人を召募し、日々に巨萬を費やす。**璘**は深宮に生長し、人事を更ず、子の襄城王の**瑒**は、勇力有り、兵を好み、**薛鏐**等有りて之の謀主と為り、以為らく、

「今は天下の大亂なり、惟だ南方は富富なり、**璘**は四道の兵を握り、封疆は數千里、宜しく金陵に據り、江表を保有すること、東晉の故事の如くすべし。」

上は之を聞き、**璘**に救してして歸りて蜀に觀せしむ。**璘**は従わず。江陵の長史の**李峴**は疾いと辭して行在に赴き、**上**は**高適**を召して之と謀る。**適**は江東の利害を陳べ、且つ**璘**が必ず敗れる之状を言う。十二月、淮南節度使を置き、廣陵等十二郡(揚州廣陵郡・楚州山陽郡・滁州全椒郡・和州歷陽郡・壽州淮南郡・廬州合肥郡・舒州同安郡・光州弋陽郡・蕪州蘄春郡・安州安陸健・黃州齊安郡・申州義陽郡・沔州漢陽郡、方鎮表には十三州に作る)を領せしめ、**適**を以て之

と為す。淮南西道節度使を置き、汝南等五郡(蔡州汝南郡・鄭州滎陽郡・許州潁川郡・光州戈陽郡・申州義陽郡)を領せしめ、來贖を以て之と為す。江東(韋陟が節度する所の者は蓋し江南東道なり。其の巡属は浙東西及び昇宣歙諸州を兼ね有つ)節度使の韋陟と共に璘を圖ら使む。

■[安祿山は潁川太守を凍殺す]安祿山は兵を遣わして潁川を攻める。城中の兵は少なく、蓄積無し、太守の薛願、長史の龐堅は力を悉くして拒守し、(12-289p)城を繞る百里、廬舎、林木は皆な盡く。期年にして、救兵は至らず、祿山は阿史那承慶をして兵を益して之を攻め使め、晝夜死闘すること十五日、城は陥ち、願、堅を執りて洛陽に送り、祿山は洛濱水上(木上×)に縛し、之を凍殺す。

■[李泌の確たる戦略眼]上は李泌に問いて曰く、

「今敵は強きこと此くの如し、何の時か定まる可きや？」

對えて曰く、

「臣が觀るに賊の獲る所の子女金帛は、皆な之を范陽に輸し、此れ豈に四海に雄據する之志有り邪！今獨り虜將のみ或は之が用を為す、中國之人は惟だ高尚等數人のみ、自餘は皆な脅從なる耳。臣を以て之を料るに、二年を過ぎずして、天下は寇無からん矣。」

上は曰く、

「何の故なるや？」

對えて曰く、

「賊之驍將は、史思明、安守忠、田乾真、張忠志、阿史那承慶等數人に過ぎず而して已む。今若し李光弼をして太原より井陘に出で、郭子儀をして馮翊より河東に入ら令めば、則ち思明、忠志は敢えて范陽、常山を離れず、守忠、乾真は敢えて長安を離れず、是れ兩軍を以て其の四將を繫ぐ也、祿山に従う者は、獨り承慶耳。願わくは子儀に敕して華陰を取る勿く、兩京之道をして常に通ぜ使め、陛下は征する所の之兵を以て扶風に軍し、子儀、光弼と互いに出でて之を撃たしめば、彼が首を救えば則ち其の尾を撃ち、尾を救えば則ち其の首を撃ち、賊をして數千里を往來し、奔命に疲れ使めん、我は常に逸を以て勞を待ち、賊至れば則ち其の鋒を避け、去れば則ち其の弊に乗り、城を攻めず、路を遏めず。來春覆た建寧に命じて范陽節度大使と為し、塞に並せて北に出で(李泌は建寧をして靈夏より豊勝雲朔の塞に沿いて、直に媯檀を擣き、范陽の北を攻めしめ、光弼をして太原より恆定を取り以て范陽の南を攻め四面と欲するなり)、光弼と南北犄角して以て范陽を取り、其の巢穴を覆えさん。賊は退きては則ち歸る所無し、留まれば則ち安きを獲ず、然る後に大軍は四合し而して之を攻めれば、必ず擒と成らん矣。」(胡三省曰く、肅宗をして泌の策を用いしめば、史思明は豈に能く再び關洛の患いを為さざらんやと)

上は悦ぶ。

■[建寧王の倓は李泌を救わんとす]時に張良娣は李輔國と相い表裡し、皆な泌を惡む。建寧王の倓は泌に謂って曰く、

「先生は倓を上^にに擧げ、臣子之效を展べるを得しむ、以て德に報いる無し、請う先生の為に害を。除かん」

泌は曰く

「何ぞ也？」

倓は良娣を以て言を為す。泌は曰く、

「此れ人の子の言う所に非ず、願わくは王は姑^{しじばら}く之を置くべし、以て先に為す勿れ。」

倓は從わず。

■[永王の璘は勝手に江南に侵攻]甲辰(40)、永王の璘は擅に舟師を引いて東巡し、江に沿い而して下り、

軍容は甚だ盛んなり、然るに猶ほ未だ割據之謀を露わさず。吳郡太守兼江南東路採訪使の**李希言**は**璘**に平牒(方鎮の位任等夷なる者は平牒す、同レベルでの公文書のやり取り)し、其の擅に兵を引いての東下之意を詰る。璘は怒り、兵を分けて其の將の**渾惟明**を遣わして**希言**を吳郡に襲わしめ、**季廣琛**をして廣陵長史、淮南採訪使の**李成式**を廣陵に襲わしむ。璘は進みて當塗(漢の丹陽県。安徽省蕪湖道當塗県、現・馬鞍山市当塗県)に至り、**希言**は其の將の**元景曜**及び丹徒(潤州丹楊郡を帯びる。唐は未だ嘗て丹徒を以て郡と名づけず、徒は當に楊に作るべし。現・鎮江市丹徒区)太守の**閻敬之**を遣わして兵を將いて之を拒ましめ、**李成式**も亦た其の將の**李承慶**を遣わして之を拒ましむ。璘は撃ちて**敬之**を斬り以て殉え、**景曜**、**承慶**は皆な(12-290p)璘に降り、江、淮は大いに震える。**高適**は**來瑱**、**韋陟**(鎮に赴き、中道にして変を聞き、会す)と安陸に會し、盟を結び衆に誓い以て之を討つ。

■**于闐**[**于闐王は自ら來援**]于闐王の**勝**は**安祿山**の反するを聞き、其の弟の**曜**に命じて國事を攝せしめ、自ら兵五千を將いて入援す。上は之を嘉し、特進に拜し、殿中監を兼ねしむ。

■**張巡は寧陵で大奮闘も、虢王の巨は報いず**令狐潮、**李庭望**は雍丘を攻め、數月下らず、乃ち杞州(唐初に置き、貞觀元年廢す。賊は復たこれを置く)を置き、雍丘之北に築城し以て其の糧援を絶つ。賊は常に數萬人、而して**張巡**の衆は才に千餘、戦う毎に輒ち克つ。河南節度使の虢王の**巨**は彭城(徐州)に屯し、**巡**に先鋒使を假す。是の月、魯(兗州)、東平(鄆州、現・山東省泰安市東平県)、濟陰(曹州、現・山東省荷沢市定陶区)は賊に陥つ。賊將の**楊朝宗**は馬歩二萬を帥いて、將に寧陵を襲い、**巡**の後を斷たんとす。**巡**は遂に雍丘を抜き、東して寧陵(雍丘より120里)を守り以て之を待ち、始めて睢陽太守の**許遠**と相い見る。是の日、**楊朝宗**は寧陵城の西北に至り、**巡**、**遠**は與に戦い、晝夜數十合し、大いに之を破り、斬首は萬餘級、流屍は汴を塞ぎ而して下り、賊は兵を収めて夜遁げる。敕して**巡**を以て河南節度副使と為す。**巡**は將士の功有るを以て、遣使して虢王の**巨**に詣りて空名告身及び賜物を請わしめ、**巨**は唯だ折衝、果毅の告身三十通を與え、賜物を與えず。**巡**は書に移して**巨**を責め、**巨**は竟に應じず。

■是の歲、北海節度使を置き、北海等四郡(青州北海郡・密州高密郡・登州東平郡・萊州東萊郡)を領す。上黨節度使は、上黨等三郡(潞州上黨郡・澤州長平郡・沁州陽城郡)を領す。興平節度使は、上洛等四郡(商州上洛郡・金州安康郡・岐州鳳翔郡)を領す。

■**吐蕃**吐蕃は威戎、神威、定戎(石堡城の北に在り)、宣威、制勝、金天(廓州西南140里に洪濟橋金天軍あり)、天成等軍(河州の西80里に索恭河天成軍有り)、石堡城、百谷城(天成的東南80里)、雕窠城(河州の西100余里にあり)を陥す。

林邑[**林邑王殺害と後継擁立**]初め、林邑王の**范真龍**は其の臣の**摩訶漫多伽獨**の殺す所と為り、盡く**范氏**を滅す。國人は其の王の**頭黎**之女を立てて**王**と為し、女は國を治める能わず、更に**頭黎**之姑の子の**諸葛地**を立て、之を**環王**と謂い、妻あわすに**女王**を以てす。

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝中之上至德二載(丁酉, 757年)

■**上皇は誥を彭原に**春, 正月, 上皇は誥を下し、憲部尚書の**李麟**(懿祖の次子乞豆の後)を以て同平章事とし、百司を總理(總行×)せしめ、**崔圓**に命じて誥を奉りて彭原に赴かしむ。麟は、**懿祖**(光皇帝、諱は天錫、太祖の父)之後也。

【安祿山殺害】

■**安慶緒は安祿山を殺し、嚴莊に兄事**安祿山は自ら兵を起こして以來、目は漸く昏く、是に至りて復た物を睹ず。又た疽を病み、性は益々躁暴し、左右の使令、小しく意の如くならざれば、動もすれば捶撻を

加え、或る時は之を殺す。既に帝を稱し、禁中に深居し、大將は其の面を見るを得ること希なり、皆な嚴莊に因りて事を白す。莊は貴くして事を用いると雖も、亦た極撻を免かれず、閻豎(統は閻宦)の李豬兒(契丹の部落に出で、十数歳、安祿山に事える。甚だ點慧なり。安祿山は刃を持して其の勢いを去る、血出ずること数升、死せんと欲す。安祿山は灰火を以て之に傳く。数日にして蘇る。因りて閻人と為る。遂に信用せらる)は撻たれること尤も多く、左右の人は(12-291p)自ら保たず。祿山の嬖妾の段氏は、子の慶恩を生み、以て慶緒に代わりて後と為さんと欲す。慶緒は常に死を懼れ、出ずる所を知らず。莊は慶緒に謂って曰く、

「事は已むを得ざる者有り、時失う可からず。」

慶緒は曰く、

「兄は為す所有れば、敢えて敬いて従わざらんや。」

又た豬兒に謂って曰く、

「汝は前後に撻を受け、寧ぞ數有らん乎！大事を行わざれば、死すること日無からん矣！」

豬兒も亦た許諾す。莊は慶緒と夜兵を持ちて帳外に立ち、豬兒は刀を執りて直ちに帳中に入り、祿山の腹を斫る。左右は懼き、敢えて動かさず。祿山は枕傍の刀を捫れども、獲ず、帳竿を撼かして、曰く

「必ず家賊也。」

腹(統は腸)は已に流血(統は流出)すること數鬥(統は數斗)、遂に死す。床下を掘ること深さ數尺、氈を以て其の屍を裹みて之を埋め、宮中を誡めて洩るるを得ず。乙卯(51)旦、莊は外に宣言して、雲わく、

「祿山は疾亟かなり。晉王の慶緒を立てて太子と為す」

と、尋ぎて帝に即位し、祿山を尊んで太上皇と為し、然る後に喪を發す。慶緒の性は昏懦にして、言辭に序無く、莊は衆が服せざるを恐れ、人に見えざら令む。慶緒は日々酒を縦にして樂しみを為し、莊に兄事し、以て御史大夫、馮翊王と為し、事の大小と無く、皆な決を取る焉。厚く諸將に官爵を加え以て其の心を悦ばす。

■[廣平王と建寧王に扱いに苦慮]上は從容として李泌に謂って曰く、

「廣平は元帥と為りて年を逾し、今建寧に命じて専ら征せしめんと欲す、又た勢いは分かれんことを恐れる。廣平を立てて太子と為せば、何如や？」

對えて曰く、

「臣は固より嘗て之を言う矣、戎事は交々切なり、須く即ち區處すべし、家事に至りては、當に上皇を俟つべし。然らざれば、後代何を以て陛下の靈武即位之意を辨ぜん邪！此れ必ず人有り、臣をして廣平と陳有ら令めんと欲する耳。臣は請う以て廣平に語らん、廣平も亦た必ず未だ敢えて當たらず。」

泌は出で、以て廣平王の叔に告げ、叔は曰く、

「此の先生は深く其の心を知る、曲に其の美を成さんと欲する也。」

乃ち入り、固く辭し、曰く、

「陛下は猶ほ未だ晨昏(人子の晨省昏定の禮、『礼記』に由来する親孝行の代表的な作法、夕方昏には両親の就寝の世話をし(定)、朝(晨)には機嫌を伺う)を奉じず、臣は何の心か敢えて儲副に當たらん！願わくは上皇が宮に還るを俟たん、臣之幸也。」

上は之を賞慰す。李輔國は本は飛龍の小兒(凡そ厩牧五坊禁苑の給使する者は皆之を小兒と謂う。李輔國は閻奴を以て閻厩の小兒と為る)なり、粗ぼ書計に闇(統は闇)なり、太子の宮に給事し、上は之を委信す。輔國は外には恭々しく謹して寡言に而して内は狡險なり、張良娣が寵有るを見、陰に之に附會し、與に相い表裡す。建寧王の俊は數々上の前に於いて二人の罪惡を詆訐(誹り暴く)し、二人は之を上を譖して曰く、

「**倓**は元帥と為るを得ざる(前巻前年九月にあり)を恨み、**廣平王**を害せんと謀る。」

上は怒り、**倓**に死を賜わる。是に於いて**廣平王**の**倓**及び**李泌**は皆な内に懼る。**倓**は**輔國**及び**良娣**を去らんと謀り、**泌**は曰く、

「可からず、王は**建寧**之禍いを見ざる乎？」

倓は曰く、

「竊に先生の為に之を憂う。」

泌は曰く、

「**泌**は主上と約有り矣(前巻前年九月)。京師を平らぐを俟ち、則ち去りて山に還り、庶わくは患いを免かれん。」

倓は曰く、

「先生が去れば、則ち**倓**は益々(続は愈々)危うからん矣。」

泌は曰く、

「王は但だ人子之孝を盡くせ、**良娣**は婦人なり、王は委曲(細かく詳らか)に之に順うべし、(12-292p)亦た何ぞ能く為さん！」

■**[功を賞するに官を以てするや否や]**上は**泌**に謂って曰く、

「今**郭子儀**、**李光弼**は已に宰相と為る、若し兩京に克ち、四海を平らければ、則ち官以て之を賞する無し、奈何せん？」

對えて曰く

「古者に官は以て能に任じ、爵は以て功に酬いる。漢、魏以來、郡縣を以て民を治めると雖も、然も功有れば則ち錫うに茅土を以てし、之を子孫傳え、周、隋に至りて皆な然り。唐の初め、未だ關東を得ず、故に封爵は皆な虚名を設け、其の實封(唐の制、實封を食む者は凡そ一戸は一丁の歳調を以て之に給す)を食む者は、繒布を給し而して已む。貞觀中(195 卷貞觀十三年にあり)に、**太宗**は古制を復せんと欲し、大臣は議論して同じからず而して止む。是に由り功を賞する者は多く官を以てす。夫れ官を以て功を賞するに二害有り、才に非ざれば則ち事を廢し、權重ければ則ち制し難し。是を以て功臣の大官に居る者は、皆な子孫之遠圖を為さず、務めて一時之權に乘じ以て利を邀め、為さざる所無し。向に**祿山**をして百里之國を有たた使め、則ち亦た之を惜しみ以て子孫に傳え、反せざりしならん矣。今之計を為すに、天下既に平らぐを俟ち、爵土を疏ちて以て功臣を賞すに若くは莫し、則ち大國と雖も、二三百里に過ぎず、今之小郡に比す可からん、豈に制し難からん哉！人臣に於いて乃ち萬世之利也。」

上は曰く、

「善し！」

■**[肅宗は保定に移る]**上は安西、北庭及び拔汗那、大食の諸國の兵が涼、鄯に至ると聞き、甲子(0)、保定(郡、本は涇衆安定郡。去載に郡名を更む。甘肅省涇原道涇川縣北五里、現・平涼市涇川縣)に幸す。

■丙寅(2)、劍南兵の賈秀等五千人は反を謀り、將軍の**席元慶**、臨邛(邛州)太守の**柳奕**は討ちて之を誅す。

■**[武威九姓商胡の反乱鎮圧]**河西兵馬使の**蓋庭倫**は武威(涼州、姑臧の旧城に治す。匈奴の築く所、南北七里、東西三里。

甘肅省武威市涼州区)の九姓商胡(ソグド人粟特人商人、康・史・安・曹・石・米・何・火尋・戊地)の**安門物**等と、節度使の**周泌**を殺し、衆六萬を聚める。武威大城之中に、小城七有り、胡は其の五に據り、二城は堅く守る。支度判官の**崔稱**は中使の**劉日新**と二城の兵を以て之を攻め、旬有七日にして、之を平らぐ。

【太原包囲戦】

■**[史思明は太原に大軍で押し寄せる]**史思明は博陵(定州)より、蔡希德(上黨から出発)は太行より、高秀巖は大同より、牛延介は范陽より、兵を引き共に十萬、太原を寇す。李光弼の麾下の精兵は皆な朔方に赴き、餘は團練烏合之衆にて萬人に滿たず。思明は以為うに太原が掌を指さして取る可しと、既に之を得れば、當に遂に長驅して朔方、河、隴取るべしと。太原の諸將は皆な懼れ、城を修めて以て之を待たんと議し、光弼は曰く、

「太原の城(汾河を左し晋を右にし、潜丘は中に在り、長さ 4321 歩、廣さ 2122 歩、周高 5153 歩)の週は四十里、賊は至るに垂々とし而して役を興すは、是れ未だ敵を見ざるに先ず自ら困しむ也。」

乃ち士卒及び民を帥い城外に於いて壕を鑿り以て自ら固める。塹(土を範して之を作る。焼かない瓦)數十萬を作り、衆用いる所を知る莫し。賊が城を外に攻めるに及び、光弼は之を用いて壘を内に増し、壞れば輒ち之を補う。(12-293p)思明は人をして攻具を山東に取り、胡兵三千を以て之を衛送し、廣陽(漢の上艾県、山西省冀寧道平定県東南、其の東に井涇関あり、現・陽泉市平定県)に至ら使む、別將の慕容溢、張奉璋は邀え撃ちて、盡く之を殺す。

■**[太原包囲戦、李光弼の作戦光る]**思明は太原を圍み、月餘にして下らず、乃ち驍銳を選んで遊兵と為し、之を戒めて曰く、

「我は其の北を攻め則ち汝は潜に其の南に趣き、東を攻め則ち西に趣き、隙有れば則ち之に乗るべし。」而るに光弼の軍令は嚴整にして、寇の至らざる所と雖も、警邏して未だ嘗て少しも懈らず、賊は入るを得ず。光弼は軍中に購募し、苟くも小技有れば、皆な之を取り、能に隨いて之を使い、人は其の用を盡くし、安邊軍(尉州興唐県に在り、尉州に銅冶有り、錢官有り、故に錢工あり。現・河南省開封市尉氏県)の錢工三を得たり、善く地道を穿つ。賊は城下に於いて仰ぎ而して侮冒し、光弼は人を遣わして地道の中より其の足を曳き而して入れ、城に臨みて之を斬る。是より賊は行くに皆な地を視る。賊は梯沖、土山を為り以て城を攻め、光弼は地道を為り以て之を迎え、城に近づけば輒ち陥ちる。賊は初め城に逼ること急なり、光弼は大砲(続は大礮)を作り、巨石を飛ばし、一發で輒ち二十餘人を斃し、賊の死者は什に二三、乃ち營を數十歩外(大砲の射程外)に退け、圍み守ること益々固し。光弼は人を遣わして詐りて賊と約し、日を刻して出で降らんとす。賊は喜び、備えを為さず。光弼は地道を穿ちて賊の營中に周ら使め、之を搯るに木を以てす。期至り、光弼は兵を勒して城上に在り、裨將を遣わして數千人を將いて出でしめ、降る狀の如し、賊は皆な目を屬す。俄に而して營中の地は陥ちり、死者は千餘人、賊の衆は驚き亂れ、官軍は鼓噪して之に乗り、俘斬は萬計。會々安祿山は死し、慶緒は思明をして歸りて范陽を守ら使め、蔡希德等を留めて太原を圍ましむ。

■**[張巡は睢陽を死守]**慶緒は尹子奇を以て汴州刺史、河南節度使と為す。甲戌(10)、子奇は歸(當に嬀に作るべし。嬀州なり。唐人の雜史は多く歸檀に作る者有り、蓋し誤りなり)、檀及び同羅、奚の兵十三萬を以て睢陽に趣く。許遠は急を張巡に告げ、巡は寧陵より兵を引いて睢陽に入る。巡は兵三千人有り、遠の兵と合わせて六千八百人なり。賊は衆を悉くして城に逼り、巡は將士を督勵し、晝夜苦戦し、或は一日二十合に至る。凡そ十六日、賊將六十餘人を擒とし、士卒二萬餘を殺し、衆氣自ら倍す。遠は巡に謂って曰く、

「遠は儒にして、兵を習わず、公は智勇兼ね濟う、遠は請う公の為に守らん、請う公は遠の為に戦わん。」是より之後、遠は但だ軍糧を調べ、戦具を修め、中に居り應接し而して已み、戰鬥の籌畫は一に巡に出る。賊は遂に夜遁げる。

【長安近辺まで回復】

■ **【河東は兩京を扼す】**郭子儀は以えらく、河東(蒲州、潼関を扼する位置にあり)は兩京之間に居り、賊を扼す要衝なり(続は欠如)、河東を得れば則ち兩京圖る可しと。時に賊將の崔乾祐は河東を守り、丁丑(13)、子儀は潜に人を遣わして河東に入り、唐の官の賊に陥ちる者と謀り、官軍の至るを俟ち、内應を為さ使む。

■ 初め、平盧節度使の劉正臣は范陽より敗れ歸り(前卷前年にあり)、安東都護の王玄志は之を鳩殺す。祿山は其の黨の徐歸道を(12-294p)以て平盧節度使と為し、玄志は復た平盧の將の侯希逸と襲いて之を殺す。又た兵馬使の董秦を遣わして兵を將いて葦筏(葦の筏)を以て度海し、大將の田神功と平原、樂安を撃ち、之を下す。防河招討使の李銑は製を承け秦を以て平原太守と為す。

■ 二月、戊子(24)、上は鳳翔に至る。

■ **【郭子儀は河東を平定】**郭子儀は洛交より兵を引いて河東に趣き、兵を分けて馮翊を取る。己丑(25)夜、河東の司戸の韓旻等は河東城を翻して官軍を迎え、賊を殺すこと千人に近し。崔乾祐は城を逾えて免かるるを得、城北の兵を發して城を攻め、且つ官軍を拒ぎ、子儀は撃ちて之を破る。乾祐は走り、子儀は之を追撃し、斬首は四千級、捕虜は五千人、乾祐は安邑に至り、安邑の人は開門して之を納れ、半ば入るも、閉門して之を撃ち、盡く殪す。乾祐は未だ入らず、白逕嶺より亡げ去る。遂に河東は平らぐ。

■ **【鳳翔と成都の通信可能、兩京と范陽といずれが先か】**上は鳳翔に至ること旬日、隴右、河西、安西、西域之兵は皆な會し、江、淮の庸調も亦た洋川、漢中に至り、上は散關より表を成都に通じ、信使は駱驛す。長安の人は車駕の至るを聞き、賊中より自ら抜き而して來たる者は日夜絶えず。西師は憩息し既に定まり、李泌は請う、

「安西及び西域之の衆を遣わして、前策の如く塞の東北に並い、歸、檀より南して范陽を取らん。」
上は曰く、

「今大衆は已に集まり、庸調も亦た至り、當に兵鋒に乗じて其の腹心を搗くべし、而るに更に兵を東北數千里に引き、先ず范陽を取るは、亦た迂(迂回、遠回り)ならず乎？」

對えて曰く、

「今此の衆を以て直ちに兩京を取れば、必ず之を得るべし。然れども賊は必ず再び強く、我は必ず又た困しまん、久安之策に非ず。」

上は曰く、

「何ぞ也？」

對えて曰く、

「今恃む所の者は、皆な西北の守塞及び諸胡之兵なり、性は寒さに耐え而るに暑さを畏れる、若し其の新たに至る之銳に乗じ、祿山の已に老れる之師を攻めれば、其の勢いは必ず兩京に克たん。春氣は已に深く、賊は其の餘衆を収め、巢穴に遁げ歸らん、關東の地は熱く、官軍は必ず困しみ而して歸るを思う、留む可からざる也。賊は兵を休め馬を秣かい、官軍之去るを伺い、必ず復た南に來たり、然らば則ち征戰之勢いは未だ涯り有る也(後に李泌の言う通りと為る)。若かず先ず之を寒郷に用い、其の巢穴を除けば、則ち賊は歸る所無く、根本は永絶すべし矣。」

上は曰く、

「朕は晨昏之戀(兩京を復して上皇を迎えること急なり)に切にして、此を待つ能わず、決す(決して李泌の策に随う能わざるをいう)矣。」

■ **【鳳翔の危機】**關内節度使の王思禮は武功(蜀の諸葛亮が師を駐す所、現・咸陽市武功県武功鎮)に軍し、兵馬使の郭

英又は東原に軍し、王難得は(武功の)西原に軍す。丁酉(33)、安守忠(安慶緒の部将)等は武功を寇し、郭英又は戦いて利あらず、矢は其の頤を貫き而して走る。王難得は之を望みて救わず、亦た走る。思禮は退きて扶風に軍す。賊の遊兵は大和關に至り、鳳翔を去ること五十里、鳳翔は大いに駭き、(12-295p)戒嚴す。

■李光弼は敢死の士を將いて出でて蔡希德を撃ち、大いに之を破り、斬首は七萬餘級。希德は遁げ去る。

■[安慶緒の体制づくり難航]安慶緒は史思明を以て范陽節度使と為し、恆陽軍(恆州の郭下に置く)事を兼ね領せしめ、媯川王に封じる。牛廷介を以て安陽軍(時に慶緒は兵を分けて鄴郡安陽県に屯す)事を領せしむ。張忠志を常山太守兼團練使と為し、井陘口に鎮せしむ。餘は各々舊任に歸りて、兵を募り以て官軍を御が令む。是より先安祿山は兩京の珍貨を得、悉く范陽に輸る。思明は強兵を擁し、富資に據り、益々驕横なり、浸く慶緒之命を用いず。慶緒は制する能わず。

■[永王の璘は揚子江に死す]戊戌(34)、永王の璘(玄宗の第16皇子、李澤)は敗死し、其の黨の薛鏐等は皆な伏して誅せらる。時に李成式は河北招討判官の李銑と兵を合わせて璘を討つ。銑の兵數千は揚子(本は鎮なり、江都県に属す。高宗は鎮を廢し揚子県を置く)に軍す。成式は判官の裴茂をして兵三千を將いて、瓜步(現・江蘇省南京市六合区瓜埠鎮)に軍せしむ。廣く旗幟を張り、江津に列す。璘は其の子の瑒と城に登りて之を望み、始めて懼色有り。季廣琛は諸將を召して謂って曰く、

「吾が屬は王に従いて此に至り、天命は未だ集まらず、人謀已に隳れ、如かず兵鋒の未だ交わらざるに及び、早く去就を圖らんには。然らず、鋒鏑に死せば、永く逆臣と為らん矣。」

諸將は皆な之を然りとす。是に於いて廣琛は磨下を以て廣陵に奔り、渾惟明は江寧(是の年丹陽の江寧県を以て、昇州江寧県を置く、現・南京市江寧区)に奔り、馮季康は白沙(廣陵郡に属す)に奔る。璘は憂懼し、出ざる所を知らず。其の夕、江北之軍は多く炬火を列ね、光は水中を照らし、一は皆な兩と為り、璘の軍は又た火を以て之に應ず。璘は以為えらく官軍は已に江を濟ると、遽に家屬を挈えて磨下と潜に遁れる。明けるに及び、濟る者を見ず、乃ち復た城に入り兵を収め、舟楫を具え而して去る。成式は趙侃等を將いて江を濟りて新豐(晉陵の界に在るべし。蓋し南朝の山陵の名ならん)に至り、璘は瑒及び其の高仙琦をして兵を將いて之を撃たしむ。侃等は逆え戦い、瑒を射て肩に中たり、璘の兵は遂に潰える。璘は仙琦と餘衆を収め、南に鄱陽(現・江西省上饒市鄱陽県)に奔り、庫物甲兵を収め、南に嶺表に奔らんと欲す。江西採訪使の皇甫旆は兵を遣わして追討し、之を擒とし、潜に之を傳捨に殺す。瑒も亦た亂兵に死す。

■[皇甫旆が璘を殺す、不可解]旆は人をして璘の家屬を送りて蜀に還らしめ、上は曰く、

「旆は既に吾が弟を生得し、何ぞ之を蜀に送らず而して擅に之を殺す邪！」

遂に旆を廢して用いず。

【関中の攻防戦激化】

■[郭晁は潼關に大敗北]庚子(36)、郭子儀は其の子の晁及び兵馬使の李韶光、大將軍の王祚を遣わして河を濟りて潼關を撃ち、之を破り、斬首は五百級。安慶緒は兵を遣わして潼關を救わしめ、郭晁等は大敗し、死者は萬餘人。李韶光、王祚は戦死し、僕固懷恩は馬首を抱いて浮きて渭水を渡り、退きて河東を保つ。

■三月、辛酉(57)、左相の韋見素を以て左僕射、中書侍郎と為し、同平章事の裴冕を右僕射と為し、並せて政事を罷む。

■[苗晉卿は左相として復歸]初め、楊國忠は憲部尚書の苗晉卿を惡み、安祿山之反する也、請いて晉卿を出して陝郡太守と為し、陝、弘農防禦使を兼ねしむ。晉卿は固く老病と辭し、上皇は悦ばず、之をして

致仕せ使む。長安の守りを(12-296p)失うに及び、**晉卿**は潜に山谷に竄す。上は鳳翔に至り、手敕して之を征して左相と為し、軍國の大務は悉く之に咨る。

■**[張九齡の先見の明]**上皇は張九齡之先見(安祿山の反相を謂う、214 卷開元二十二年)を思い、之が為に流涕し、中使を遣わして曲江(現・広東省韶関市曲江區)に至りて之を祭らしめ、厚く其の家を恤む。

■**[張巡は睢陽を死守]**尹子奇は復た大兵を引いて睢陽を攻める。張巡は將士に謂って曰く、「吾は國の恩を受け、守る所は、正死ある耳。但だ念うに諸君は軀命を捐て、草野に膏し、而るに賞は勳を酬いず(虜王巨が告身を吝み、賜物を與えざりしを以て、將士の懇望して力戦せざらんことを恐れる、故に先ず此の言を以て慰撫する)、此を以て心を痛める耳！」

將士は皆な激勵し奮わんと請う。巡は遂に牛を椎(背骨、転じて打つ)し、大いに士卒に饗し、軍を盡くして出で戦う。賊は兵少なきを望見して、之を笑う。巡は旗を執り、諸將を帥いて直ちに賊の陣を衝く。賊は乃ち大いに潰え、將三十餘人を斬り、士卒三千餘人を殺し、之を逐うこと數十里。明るる日、賊は又た軍を合わせて城下に至り、巡は出で戦い、晝夜數十合、屢々其の鋒を摧き、而して賊は攻圍すること輟まず。

■**[河東の攻防戦]**辛未(7)、安守忠は騎二萬を將いて河東を寇し、郭子儀は撃ちて之を走らせ、斬首は八千級、捕虜は五千人。

■**[顏真卿は大迂回して帝と合流]**夏、四月、顏真卿は荊、襄より北に鳳翔に詣り(平原を棄てて河を渡り行在に赴かんと欲す。而るに陝洛は賊の梗する所と為る。故に南して荊襄に奔り、然る後に上津路を取り、北して鳳翔にに至る)、上は以て憲部(刑部)尚書と為す。

■**[郭子儀は三原に李歸仁を撃退]**上は郭子儀を以て司空、天下兵馬副元帥と為し、兵を將いて鳳翔に赴か使む。庚寅(26)、李歸仁は鐵騎五千を以て之を三原(漢の池陽、北魏は三原県を置く。陝西省閩中道、現・咸陽市三原縣)の北に邀え、子儀は其の將の僕固懷恩、王仲升、渾釋之、李若幽等をして兵を伏せて之を白渠(漢の白公の開く所なり。因りて名づける)の留運橋に邀た使め、殺傷して略ぼ盡くし、歸仁は水を遊び而して逸れる。若幽は、神通(淮安王神通は隋の義寧の初め、兵を起こして唐の高祖に応ず)之玄孫也。

■**[清渠の敗北]**子儀は王思禮の軍と西渭橋(唐は長安に都して渭水に跨りて三橋を為る。東渭橋、中渭橋、西渭橋)に合い、進みて瀟西(瀟水は杜陵の樊川に出ず。漢の故の長安白の西を過ぎ、北して渭水に注ぐ)に屯す。安守忠、李歸仁は京城の西清渠(唐の京城の西、漕渠の東に在り、秦の故の杜南城に直る)に軍す。相い守ること七日、官軍は進まず。五月、癸丑(49)、守忠は偽りて遁げ、子儀は師を悉くして之を逐う。賊は驍騎九千を以て長蛇の陣を為す、官軍は之を撃つ、首尾兩翼と為り、官軍を夾撃し、官軍は大いに潰える。判官の韓液、監軍の孫知古は皆な賊の擒とする所と為り、軍資器械は盡く之を棄てる。子儀は退きて武功を保ち、中外は戒嚴す。

■**[官爵を以て功を賞す極]**是の時府庫は蓄積無く、朝廷は専ら官爵を以て功を賞し、諸將は出征するに、皆な空名の告身を給し、開府、特進、列卿、大將軍より、下は中郎、郎將に至るまで、事に臨みて名を其の後に注するを聽す。又た信牒(未だ告身有らず、先ず牒を給して以て信と為す)を以て人に官爵を授けるを聽し、異姓の王に至る者有り。諸軍は但だ職任を以て相い統攝し、(12-297p)復た官爵の高下を計らず。清渠之敗に及び、復た官爵を以て散卒を収める(壞乱して罪を畏れて賊に帰せんことを恐れ、復た官爵を以て之を収む)。是に由りて官爵は軽く而して貨は重く、大將軍の告身は一通、才に一醉に易える。凡そ應募して軍に入る者は、一切金紫を衣、朝士僮僕の金紫を衣、大官を稱し、而して賤役を執る者有るに至る、名器之濫れは、是に至り而して極まれり焉。

■**[房瑄の罷免は軽々し]**房瑄は性は高簡、時に國家は多難にして、而るに瑄は多く病いと稱して朝謁せ

ず、職事を以て意と為さず、日々庶子の劉秩、諫議大夫の李揖と與に釋(仏教)、老(老子)を高談し、或は門客の董庭蘭が琴を鼓するを聴き、庭蘭は是を以て大いに權利を招く。御史は庭蘭が贓賄すると奏し、丁巳(53)、瑄を罷めて太子の少師と為す(胡三省曰く、房瑄は既に師を敗り、而も過を補うを思わず。之を罷めて散官と為すは猶ほ輕典なりと)。諫議大夫の張鎬を以て中書侍郎、同平章事と為す。

■【僧が太平を致さず】上は常に僧數百人をして道場を内に為り、晨夜佛を誦せ使む。鎬は諫めて曰く、「帝王は當に徳を修めて以て亂を弭(ゆはずの意味)め人を安んずべし、未だ僧に飯して太平を致す可きを聞かざる也！」

上は之を然りとす。

■庚申(56)、上皇は上の母の楊妃(隨の納言楊士達の曾孫にして、景雲の初めに東宮に入り、良媛となり實に上を生む)を追冊して元獻皇后と為す。

【南陽・睢陽攻防戦】

■【魯炅はついに南陽を開城】山南東道節度使の魯炅は南陽を守り、賊將の武令珣、田承嗣は相い繼いで之を攻める。城中の食は盡き、一鼠も直あたひは錢數百、餓死者は相い枕藉す。上は宦官將軍(ついに宦官が將軍となる)の曹日昇を遣わして往きて宣慰せしむ、圍いは急にして、入るを得ず。日昇は單騎にして入りて命を致さんと請う、襄陽太守の魏仲犀は許さず。會々顏真卿は河北より至りて、曰く、

「曹將軍は萬死を顧みず、以て帝に命を致さんとす、何為れぞ之を沮まん！借使達せずとも、一使者を失うに過ぎず。達すれば、則ち一城之心固まらん矣。」(この年夏四月に顏真卿は靈武に至る、この前の出来事)

日昇は十騎と偕な往き、賊は其の銳を畏れ、敢えて逼らず。城中は自ら謂えらく望み絶えると、日昇を見るに及び、大いに喜ぶ。日昇は復た之が為に襄陽に至りて糧を取り、千人を以て糧を運び而して入り、賊は遏める能わず。炅は圍中に在ること凡そ週歲(去年五月南陽を圍む)、晝夜苦戦し、力は竭き支える能わず、壬戌(58)夜、開城し、餘兵數千を帥いて圍みを突き而して出で、襄陽に奔り、承嗣は之を追い、轉戦すること二日、克つ能わず而して還る。時に賊は南して江、漢を侵さんと欲す。炅が其の衝要を扼するを頼り、南夏は全くするを得たり。

■司空の郭子儀は闕に詣りて自ら貶するを請う(清渠の敗の責任)。甲子(0)、子儀を以て左僕射と為す。

■【張巡の計略光り、尹子奇は片目を喪う】尹子奇は兵を益し睢陽を圍むこと益々急なり、張巡は城中に於いて夜鼓を鳴らして隊を嚴し、將に出で撃たんとする者が若し。賊は之を聞き、且に達するまで儆備す。既に明け、巡は乃ち兵を寝め鼓を絶つ。賊は飛樓を以て城中を瞰、見る所無く、遂に甲を解いて休息す。巡は將軍の南霽雲、郎將の雷萬春等十餘將と各々五十騎を將いて開門して突出し、直ちに賊の營を衝き、子奇の麾下に至り、(12-298p)營中は大いに亂れ、賊將五十餘人を斬り、士卒五千餘人を殺す。巡は子奇を射んと欲し而るに識らず、乃ち蒿はずを刻りて矢と為し(蒿矢は射ると音が出る鏑矢、物事の始まり・最初を意味する言葉)、中たるは者喜び、巡の矢は盡きると謂い、走りて子奇に白し、乃ち其の狀を得、霽雲をして之を射使め、其の左目を喪い、幾んど之を獲んとす。子奇は乃ち軍を収めて退き還る。

■【楊務欽の來降】六月、癸未(19)、田乾真は安邑を圍む。會々陝郡の賊將の楊務欽は密に歸國せんと謀り、河東太守の馬承光は兵を以て之に應じ、務欽は城中の諸將の己に同ぜざる者を殺し、城を翻して來降す。乾真は安邑を解いて、遁げ去る。

■【王去榮の処分論議】將軍の王去榮(富平の人)は私怨を以て本縣令を殺し、死に當たる。上は其の善く砲を用いるを以て、壬辰(28)、敕して死を免じ、(胡三省曰く、時に陝郡は新たに復し、兩京の間に介居し、賊の必ず攻める所

なり。上は去榮の死を免じて其の力用を収めんと欲し、而して其の国法を墮るを計らざるなりと)白衣を以て陝郡に於いて力を效さしむ。中書舍人の賈至は即ち行下せず、上表して、以為く、

「去榮は狀無く、本縣之君を殺す。《易》(坤卦文言の辭)に曰く、『臣其の君を弑し、子其の父を弑するは、一朝一夕之故に非ず、其の由りて來たる所の者は漸なり矣。』若し去榮を縱せば、漸を生ずと謂う可し矣。議者は謂えらく陝郡初めて復し、其の人に非ざれば守る可からず。然らば則ち它に去榮無き者は、何を以て亦た能く堅守する乎？陛下が若し砲石の一能を以て即ち殊死を免ずれば、今諸軍の技藝絶倫なる者は、其の徒は實に繁し。必ず其の能を恃みて、所在上を犯さん、復た何を以て之を止めん！若し止だ去榮を捨し而るに其の餘の者を誅せば、則ち是れ法令は一ならず而して人を誘いて罪に觸れしむる也。今一の去榮之材を惜みて而して殺さざれば、必ず十の去榮之材の如き者を殺せば、亦た其の傷益々多からず乎！夫れ去榮は、逆亂之人也、焉んぞ此に逆にし而して彼に順に、富平に亂にし而して陝郡に治に、縣君(縣令)に悖り而して大君に悖らざる有らん歟！伏して惟んみるに明主は其の遠き者、大なる者を全くすれば、則ち禍亂は日ならず而して定まらん矣。」

上は其の事を下し、百官をして之を議せ令む。太子の太師の韋見素等は議して、以為く、

「法者天地の大典なり、帝王すら猶ほ敢えて擅殺せず、而して小人は擅殺するを得る、是れ臣下之權は人主に過ぎる也。去榮は既に殺人して死なざれば、則ち軍中の凡そ技能の有る者は、亦た自ら憂い無しと謂う、所在暴横ならん。郡縣を為める者は、亦た難からず乎！陛下は天下の主と為り、愛に親疏無し、一の去榮を得るに萬姓を失えば、何の利か之れ有らん！律に於いて、本縣令を殺せば、十惡(唐初に房玄齡は隋に依りて律を定め、十惡の条有り。謀反・謀大逆・謀叛・惡逆・不道・大不敬・不孝・不睦・不義・内亂)に列す。而るに陛下が之を寬せば、王法は行われず、人倫の道は屈せん、臣等は詔を奉じ、従う所を知らず。夫れ國は法を以て理め、軍は法を以て勝つ。恩有りて威無ければ、慈母も其の子を使う能わず、陛下は厚く戰士を養い而も戦う毎に利少なきは、豈に無法に非ざる邪！今陝郡は要なりと雖も、法よりも急ならざる也。(12-299p)法有れば則ち海内克たざるを憂うる無し、況んや陝郡を乎！法無ければ則ち陝郡も亦た守る可からず、之を得るとも何の益あるや！而して去榮の末技は、陝郡は之を以て存亡せず。王法の有無は、國家乃之が為に輕重す。此れ臣等が區區として陛下が貞觀之法を守らんことを願う所以なり。」

上は竟に之を捨す。至は、曾(210卷先天元年にあり)之子也。

■南充(果州)の土豪の何滔は亂を作し、本郡防禦使の楊齊魯を執る。劍南節度使の盧元裕は兵を發して討ちて之を平らぐ。

■秋、七月、河南節度使の駑蘭進明は高密、琅邪に克ち、賊二萬餘人を殺す。

■戊申(44)夜、蜀郡の兵の郭千仞等は反し、六軍兵馬使の陳玄禮、劍南節度使の李暄は討ちて之を誅す。

■[睢陽攻防戰、張巡は奇策で防衛]壬子(48)、尹子奇は復た數萬を徵兵し、睢陽を攻める。是より先、許遠は城中に於いて糧を積むこと六萬石に至り、虢王の巨は其の半を以て濮陽、濟陰の二郡に給せしむ。遠は固く之を争い、得る能わず。既に而して濟陰は糧を得、遂に城を以て叛し、而して睢陽城は是に至りて食盡く。將士は人ごとに米を廩(當に稟とすべし)すること日に一合、雜じうるに茶紙、樹皮を以てし食と為す、而して賊は糧運通じ、兵は敗れば復た征す。睢陽の將士は死すれども益すを加えず、諸軍の饋救は至らず、士卒は消耗して一千六百人に至り、皆な饑え病して鬥うに堪えず、遂に賊の圍む所と為り、張巡は乃ち守具を修めて以て之を拒む。賊は雲梯を為り、勢いは半虹に如く、精卒二百を其の上に置き、之を推して城に臨み、騰りて入ら令めんと欲す。巡は預め城に於いて潜に三穴を鑿り、梯の將に至らんを候

い、一穴の中より大木を出し、末に鐵鉤を置きて、之を鉤し退くを得ざら使む。一穴中より一木を出し、之を拄え進むを得ざら使む。一穴の中より一木を出し、木末に鐵籠を置き、火を盛りて之を焚き、其の梯は中に折れ、梯上の卒は盡く焼死す。賊も又た鉤車を以て城上の棚閣(城上に於いて木を架して棚を作り、場外に跳出すこと四五尺許り。上に屋宇有り、風雨を蓋う可し。戰士は之に居り以て外敵を臨察す)を鉤し、鉤之及ぶ所は、崩陥せざるは莫し。巡は大木を以て、末に連鎖を置き、鎖の末に大鑿を置き、其の鉤頭を揚し、革車を以て之を抜いて城に入れて、其の鉤頭を截り而して車を縦ちて去ら令む。賊は又た木驢(車輪のついた刑具)を造りて城を攻め、巡は金汁を溶かして之を灌ぎ、投じるに應じて銷鑠(金属が溶ける)す。賊も又た城の西北隅に於いて土囊を以て柴を積み磴道(石段、石橋など)を為り、城に登らんと欲す。巡は輿に利を争わず、毎夜、潜に松明、干蒿を以て之を中に投じ、積十餘日を積み、賊は之を覺らず、因りて軍を出して大いに戦い、人をして風に順いて火を持ち之を焚か使め、賊は救う能わず、二十餘日を経、火は方に滅えんとす。巡之為す所は、皆な機に應じて立ちどころに辨じ、賊は其の智に伏し、敢えて復た攻めず、遂に城外に於いて三重の壕を穿ち、木柵を立て以て巡を守り、巡も亦た其の内に於いて壕を作りて以て之を拒む。(12-300p)

■丁巳(53)、賊將の安武臣は陝郡を攻め、楊務欽は戦死し、賊は遂に陝(孤城を以て強寇の間に介居し、外に救援無し、宜なり其の屠を受けること)を屠る。

■崔渙は江南に在り、選補の冒濫なる者衆し、八月、甲申(20)、渙を罷めて餘杭(杭州)太守、江東採訪、防禦使と為す。

■張鎬を以て河南節度、採訪等使を兼ね、賀蘭進明に代らしむ。

■靈昌太守の許叔冀は賊の圍む所と為り、救兵至らず、衆を抜きて彭城に奔る。

■[張巡は包圍の賊に逆順を説く]睢陽の士卒の死傷之餘は、才に六百人、張巡、許遠は城を分け而して之を守り、巡は東北を守り、遠は西南を守り、士卒と同じく茶紙を食し、復た城を下らず。賊士の城を攻める者は、巡は逆順を以て之を説き、往往にして賊を棄てて來降し、巡の為に死戦す、前後に二百餘人有り。

■[南霽雲は臨淮に急を告げ、一指を留める]是の時、許步冀は譙郡に在り、尚衡は彭城に在り、賀蘭進明は臨淮に在り、皆な兵を擁して救わず。城中は日々蹙み、巡は乃ち南霽雲をして三十騎を將いて圍みを犯して而して出で令め、急を臨淮に告げ令む。霽雲は城を出、賊衆の數萬は之を遮り、霽雲は直ちに其の衆を衝き、左右は馳せて射、賊衆は披靡し、止だ兩騎を亡うのみ。既に臨淮に至り、進明を見、進明は曰く、「今日睢陽の存亡を知らず、兵去くとも何の益ありや！」

霽雲は曰く、

「睢陽が若し陥れば、霽雲は請う死を以て大夫に謝せん。且つ睢陽が既に抜ければ、即ち臨淮に及ばん、譬えば皮毛の相い依るが如し、安んぞ救わざるを得ん！」

進明は霽雲の勇壯なるを愛し、其の語を聽かず、強く之を留め、食と樂を具え、霽雲を延きて坐せしむ。

霽雲は慷慨し、泣いて且つ語りて曰く、

「霽雲が來たる時、睢陽之人は食わざること月餘矣！霽雲は獨り食わんと欲すると雖も、且に嚙を下らざらんとす、大夫は坐して強兵を擁し、睢陽の陷没するを觀る、曾て災いを分けて患いを救う之意無し、豈に忠臣義士之為す所なり乎！」

因りて一指を噛み落とし以て進明に示して、曰く、

「霽雲は既に主將之意を達する能わず、請う一指を留めて以て信を示し歸り報ぜん。」

座中は往往にして為に泣下る。

■[救援來たらず]霽雲は進明が終に師を出だす意無きを察し、遂に去る。寧陵に至り、城使廉坦(張巡の署

名する所)と同じく歩騎三千人を將い、閏月、戊申(32)夜、圍みを冒し、且つ戦い且つ行き、城下に至り、大いに戦い、賊營を壊し、死傷之外、僅かに千人の入城するを得たり。城中の將吏は救い無きを知り、皆な慟哭し、賊は援けの絶えるを知り、之を圍むこと益々急なり。

■[賀蘭進明の小心]初め、房瑄は相と為り、賀蘭進明を惡み(去載十月にあり)、以て河南節度使と為し、許叔冀を以て進明の都知兵馬使と為し、俱に御史大夫を兼ねしむ。叔冀は自ら麾下の精銳なるを恃み、且つ官は進明と等しく、其の節制を受けず。故に進明は敢えて兵を分けず、惟だ巡、遠の功名を疾むに非ず、亦た叔冀の襲う所と為るを懼れる也。

■戊辰(4)、上は諸將を勞饗し、遣わして長安を攻めしめ、郭子儀に謂つて曰く、
「事之濟否は、此の行に在り也！」

對えて曰く

「此の行は捷たず、臣は必ず之に死せん！」(12-301p)

■[賊は復た武功に屯せず]辛未(7)、御史大夫の崔光遠は賊を駱谷に破り、光遠は行軍司馬の王伯倫、判官の李椿二千人を將いて中渭橋を攻め、賊の橋を守る者千人を殺し、勝ちに乗りて苑門(長安)に至る。賊の先に武功に屯する者有り、之を聞き、奔り歸り、苑北に遇い、合戦し、伯倫を殺し、椿を擒として洛陽に送る。然れども是より賊は復た武功に屯せず矣。

■賊は屢々上黨を攻め、常に節度使の程千里の敗る所と為る。蔡希德は復た兵を引いて上黨を圍む。

令和8年1月16日 翻訳開始 10209文字

令和8年1月22日 翻訳終了 20936文字